

茅ヶ崎まるかじりプロジェクト

—減災への取組みから始める、共に考え合う「場」づくり—

The Chigasaki Big Bite Project: Thinking Together about Disaster Risk Reduction Activities

高橋 玲子¹
Reiko TAKAHASHI

はじめに

「できる人が、できる時に、できることで、それなりに楽しくね」と目の前の気になることに取り組んできた活動を振り返り、何度も失敗し、乗り越えることのできなかつた、考え合う「場」づくりを、3.11以降の減災への取組みを通して、再チャレンジすることとなった。

1. かかわる

1. 茅ヶ崎トラストチームとは

①小学校での保護者有志活動からPTA活動へ



トイレスタッフ作成の紙芝居やキャラクター

1997年、子どもの通う小学校のPTAから、学校の中で気がついたことを持ち寄り議論する「特別スタッフ」²の募集があった。茅ヶ崎市に転入してきた私は、あまりにも臭い学校のトイレにびっくりし、なんとかしたいと応募した。「トイレ掃除をさせてください」と学校にお願いし、「トイレスタッフ」が掃除を続け、その報告を学校にし、保護者にはイラスト入りで掃除の案内を出し続けた。企業・トイレ協会・教育委員会等を訪問し、3Kトイレ³が施設管理の問題だけでなく、私たち保護者の家庭教育の問題も含まれていることを理解した。又、強い洗剤を使って掃除することできれいになっていくトイレをみて、この強い洗剤の入った水はどこにくのか、世界中のトイレが水洗トイレになったらどうなるのか、と様々なシステムの繋がりに気づき、わが子が使うトイレのことだけを考えているのでは、地球規模の課題は解決できない、と知るにいたった。その後先生や事務の方と協力して、学校のトイレは改修⁴された。今となつては、様々な課題を持ち寄り、みんなで一緒に考



当時のスタッフ通信

1 茅ヶ崎トラストチーム 代表

2 応募者は3人程度であったように記憶している

3 「臭い・汚い・暗い」の3Kと揶揄される学校のトイレ

4 1999年湘南教育研究集会 報告書「美しい浜須賀小をめざして」に記載されている

え、解決する文化をその後に継続できなかつたのが悔やまれる。

1999年、小学校の教職員組合とPTAで共催した教育懇談会にて「つなげよう ひろげよう 人と人とのつながり 自然と人とのつながり」と題し、神戸連続児童殺人事件、文京区幼女殺人事件を話題にし、『子どもの為』という言葉で、大人の都合を正当化するのは止め、そろそろ本音の部分で話し合っていたら、と保護者の有志活動であるスタッフ制による学校支援⁵を提案した。

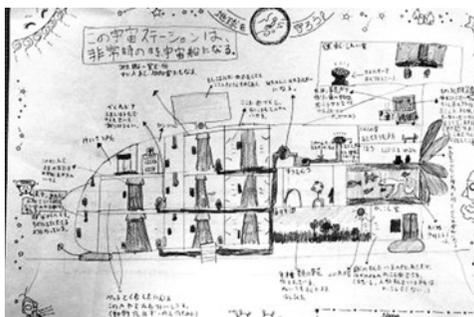
2000年、学校の完全週5日制の導入を控え、PTAで、地域に戻る子どもたちの遊び場をどのように充実させるか調査をしたところ、宅地化が進んだ地域における唯一の遊び場が、小学校の校庭であるという結果が出た。その結果をうけて「週休二日になり子どもの遊べる時間は増えたのに、広々と遊べるスペースがない、変質者や交通事故が心配で外で遊ばせるのは不安」などの保護者の声から『ウィークエンドスタッフ』が発足し、学校と協議を重ね『浜っ子パーク』という遊び場が、のちに開設されることとなる。

2001年、「できる人が、できる時に、できることで」をモットーとしたスタッフ制度⁶が活発化し、主に月1回の土曜日に実施されていた保護者参加・参画のさまざまな交流プログラムの中で、子どもたちは、仕事も様々であれば、興味・関心も違う大人との関わりを通して、学校や家庭以外の社会との関わりを実現していた。まさに、避難所となる学校に人々が集い、活動し、季節折々の景観に癒される「公共空間」が実現していた。当時、不登校はゼロであった。

学校とPTAの取り組みは、2001年5月22日の日本経済新聞「教育を問う 第6部 再生への模索『改革ドミノ・窮状隠さず地域に輪』」で取り上げられた。文末に「いくら優れた学校を作っても、そのノウハウを共有する仕組みがなければ改革は広がらない。」と記されている。同年10月、校内研究会で保護者による教育支援の様子を展示公開した。

②浜っ子トラストチームから茅ヶ崎トラストチームへ

2002年、完全週5日制が実施され平日の放課後の居場所として、小学校ふれあいプラザ事業が市の事業として実施されることとなった。月に1回、土曜日に開催することとなった「浜っ子パーク」では、より多くの人に参加、参画してもらう為の模索がはじまった。2003年、学校支援の仕組みづくりについて、学校長と担当教員と私で「スタッフ制による計画的、継続的な子ども達への支援活動が、学校教育に、よりよい影響を与えている。児童が卒業しても、引き続き支援をお願いしたい。従来のスタッフによる学校支援活動を基盤に、学校としては、自発的、自律的な個々の活動のネットワーク化が進む事を望む。又、今後、意志ある個人に学校支援をお願いする可能性もあるので、学校支援の最低限のルールなどを決めていきたい。スタッフ制度による学校支援活動を基盤に学校支援ボランティア



子どもたちの先輩である野口宇宙飛行士にちなんで「浜っ子パーク」を「宇宙っ子パーク」に。小学校の校庭が宇宙船だったらと想像し、5年生に絵をかいてもらい、展示した。

5 教育委員会から配布されたPTAの手引書内に、新潟県小千谷市立小千谷小学校の地域ぐるみの学校支援の様子が紹介されていた。又、茅ヶ崎市教育委員会「茅の響き合い教育プラン」を参考とした。

6 当時、10近くのスタッフ活動があった。

「IAのネットワーク化をはかりたい。」等話し合った。

2004年、この話し合いを受け、PTA活動から（仮称）浜っ子応援団へ、そして任意団体「浜っ子トラストチーム⁷」を設立し自立した運営を行うこととなった。活動の目的は、茅ヶ崎にある自然、歴史、文化、人的な資本の価値を尊重し持続可能な社会を将来世代につなぐ仕組みづくりを目的とし、目的を果たすために（1）持続可能な社会づくりの担い手を育む「場」の企画・運営、（2）情報の蓄積と発信、（3）目的に賛同する団体とのパートナーシップ事業を行うこととした。

しかし当時の校長が道半ばで死去され、学校支援の仕組みづくりは頓挫することとなる。話し合ったことを継続して議論していく仕組みや文化が伴わなければ、課題解決に繋がらないことを痛感することとなる。

その後「浜っ子トラストチーム」は自立した運営を行うため、民間の助成金を得ながら「地球市民」を意識して学校支援・体験活動支援⁸を市内外の市民団体・企業・大学・行政の協力を得て実施した。テーマ⁹を設定しても、地球市民を自分のこととイメージするのは難しかったが、この時の経験は、後に経済、環境、教育の3つのEを繋げて考えるきっかけとなった。

2008年、浜っ子トラストチームを茅ヶ崎トラストチームに編成しなおし、まずは、市民に近い茅ヶ崎規模で考え、市民の為に定められている様々な計画に照らし合わせながらの活動を行うこととし、市民活動団体としての登録をすることとなった。

③地域活動、社会活動の中で

子どもの卒業は、ある意味、国を上位においた強固な社会システムの枠内でのPTA活動の卒業を意味し、活動を続けるには大変な困難が伴った。PTA会長としてイベントへの参加を依頼し快諾してくれた地域団体に、浜っ子トラストチーム代表としての依頼は受けて貰えなかったことなどがあった。

行政運営への市民参加の推進を図る為の審議会に、公募委員として参加したが、住民の為に作られている計画・施策が、市民と乖離しているように思われた。10年後に大人になる子どもたちに計画策定への参加・参画について提案しても、同じ立場であるはずの市民から一蹴されることもあった。2005年より「茅ヶ崎市自治基本条例（仮称）」について、市民検討委員会の活動が始まっていたし、メディア等もそれを後押ししていたが、現場では異なるメッセージがあり、ダブルバインドの状況に葛藤することとなった。



藤本倫子環境保全活動助成基で作成した報告書



TOTO水環境基金で作成した報告書

7 PTAから地域に移行した一部のスタッフ活動が市民活動保険の対象となるよう、当初は暫定的に団体を立ち上げた。

8 その時の様子は、「地球市民 浜っ子プロジェクト2004」「地球市民 浜っ子プロジェクト2006」に記載

9 2004年度より、「省エネ・少ゴミ・繋げる生命」「ゴミ」「水」「いのちのバトン」を各年のテーマとし、つながりと連続性を意識したプロジェクトを展開。2008年度より「茅ヶ崎まるかじり」プロジェクトと題し、展開。

2. つなぐ

(1) 自然、人、社会とのつながり

コミュニケーション不全状況を乗り越える支えとなったのは、校庭環境整備・体験学習支援や体験遊び場での子どもたちや保護者からの反応であった。

事例を紹介する。

■ 1年女子（浜っ子パーク）

一人で、「浜っ子パーク」開園中の2時間黙々と泥団子を作る。月に1回泥団子を作り、自足感があつたのか、その後は友人を連れてきて、遊びが広がる。

■ 1年生男子（浜っ子パーク）

友達とケンカしたり、悪態をついたりして、スタッフに叱られる事も少なくなかった1年生が、フリーマーケットを開催した時に「お金持ってきていないから手伝わせて！」と言う。1年生なりの工夫だったようだ。その意欲をまわりの大人に誉められ、お手伝いを頑張ったご褒美にカレーをもらい、満足げな表情で帰る。まわりの人との関わりの中で、子どもも大人も共に学習する。



2時間、喋ることもなく、団子を作り続けていた。

■ 2年（体験学習支援）

マッチを使って火をおこし、アジを自分でさばき食べ、生ゴミは土にかえす、という体験学習支援をした時のことである。最初は嫌がっていた児童もいたが、4クラス全員が手を血だらけにして手さばきを行った。「食べる」という一連のプロセスに共に参加し、みんなで食べる。アジの骨せんべい（骨を油であげたもの）を食べた男子が、手伝ってくれた母親に「今日のお誕生日、これ、つくって！」を言っていた。「共食」は、その社会の文化を継承していくと理解し、食べて出すまでの過程を大切にすることとした。

■ 低学年（浜っ子パーク）

体育館でバスケットをしている中学生に、浜っ子パークにきていた小学生は羨望の眼差しを送っていた。異年齢が集うことで、憧れをスタートとした模倣がはじまることに気づく。

■ 3年男子（浜っ子パーク）

どんと焼きをはじめて実施した時のことである。だんごの持ち寄りをチラシに記載。「みんなにわけてあげてね。」とだんごを持ってきた子どもに言っても納得いかない様子。余分に団子をつくって子どもに「持ってきていない子に、わけてあげなさいね。」と家庭でいうこともなく、加えて普段の生活の中で「あるものをみんなで分ける」という「分かち合い」を体験する場面もなくなったことに気づき、その後、あえて「分け合う」ということを取り入れることとした。

■ 4年男子（浜っ子パーク）

子どもたちに鍬やスコップを使ってたい肥場の手入れをしてもらおうと、まわりとの安全な距離がはかれないでいる。しかし道具を使っているうちに、危険な道具を注意深く使えるようになる。

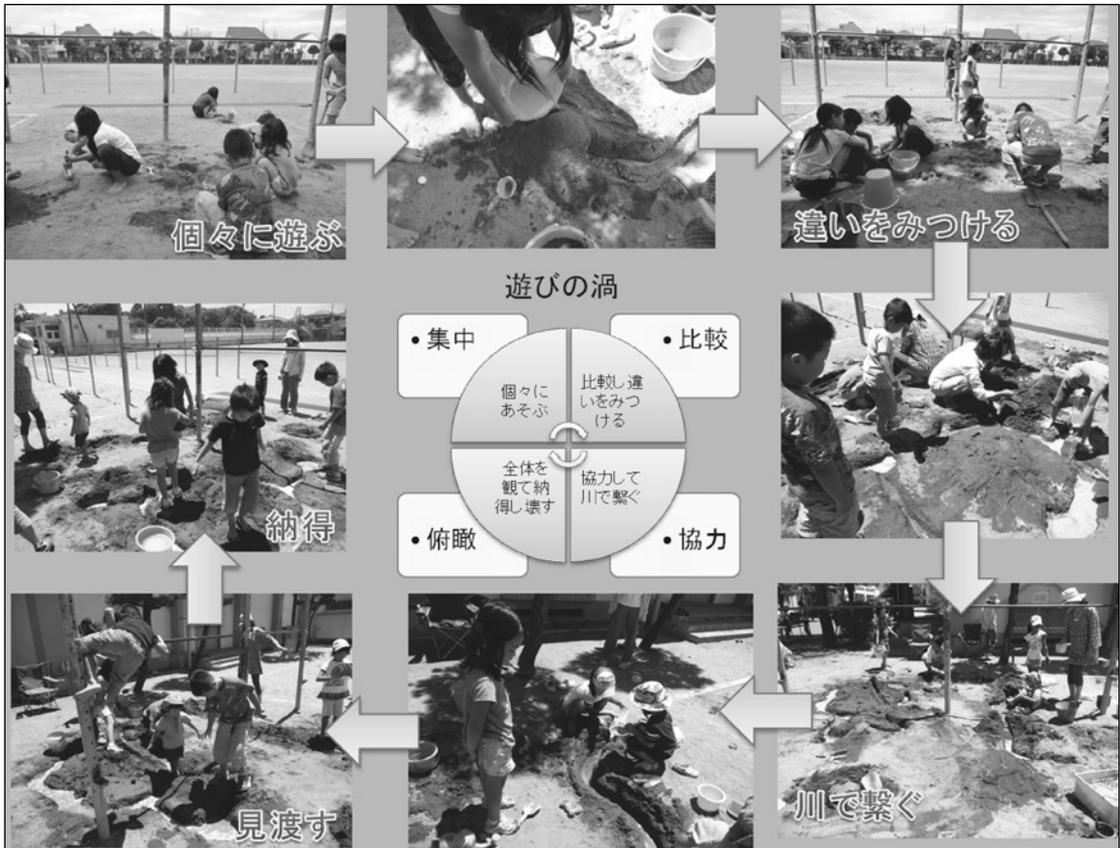
■ 5年男子（浜っ子パーク）

校庭の片隅のたい肥場には、生ゴミを入れたり、年末には落ち葉をたい肥場に入れる。この土を使って緑のカーテンをつくる。年間を通して「浜っ子パーク」に参加していた5年生が「わかった」という。学校で習った知識と自らの体験を重ねあわせて、資源の循環を理解したようだ。同様なことを、大人も体験する。

■6年男子（浜っ子パーク）

砂場で山をつくり、水を流して川をつくっていた男子の目がひかり「わかった」という。何がわかったかを聞くと、5年生の理科の授業でビデオで川がつくられる様子をみたが、それと砂場の山で水を流したのと同じであるという。体験と知識が合致した瞬間である。この経験をヒントに、その後、土木工学を専門とした大学の教授に来校して頂き、砂場での授業が展開され、校庭のカエ池の改修¹⁰に繋がった。そして昨年より実施している防災イベントに繋がった。

■幼児～大人（浜っ子パーク）



幼児から大人まで一緒に砂場で自由に遊ぶ。大人は頭の中でイメージしてからつくることが多いが、子どもたちは何も考えずに穴をほり、山をつくることから始める。まずは自足感が得られるまで個々に遊ぶ。砂で遊ぶことが少ないせいか、砂を盛るだけの山をつくりすぐにつぶれることもある。周りの山と比較して違いを見つけ、どうやったらつぶれない山をつくることのできるかを探る子もいれば、何も考えないままの子もいる。

穴を掘ると必ず何かを入れたいくなる。水の利用を促すと嬉々として水を入れ続ける。水をバケツに入れて運ぶ経験が少ないせいか、なかなかうまく運べない。「2人で運べば？」と声をかけると、背

10 取り組みの様子は、2007年 湘南教育研究集会 報告書「地域と連携したビオトープづくり」に記載されている

の高さが違うペアを組みうまく運べない。何度も水をこぼしながら協力して水を運ぶ方法を考える子どももいれば、諦めて1人で水を運ぶ子どももいる。

木端を周辺に置くと川に橋を渡す。経験が少ないせい木木の強度を予測しないまま川に橋をかけるので、載ると壊れる。

「隣の山を繋いで、まちをつくらうよ」と声をかけてみる。子どもたちのみならず大人も楽しそうに川で繋いだり道路をつくったりして協力しあう。バラバラの遊びが繋がると、子どもたちは立ち上がった鉄棒にのったりして全体を見回す。

年に1回の砂場での遊びを10年近く続けているが、砂場内での遊びの広がり方が、知識が創造されるプロセスのように思える。

子どもたちが砂場に夢中になっている時、大人が子どもたちの遊びの流れを壊さないように道具や知識を提供すると遊びが広がる。液状化現象や時滑りなど自然界の恐ろしさを遊びの中で表現する事もできる。その遊びに言葉で意味を持たせると学習になる。砂場で科学的な興味につながるような遊びができそうだと思っている。

砂場で子どもたちが自ら学んでいく様子は、学校教育での教育とは別の学び方があるのではないかと次第に確信をもつこととなった。又、大きな危険を察知する能力を開発するためにも、身近な遊び場で小さな危険を経験することが必要ではないかと気づく。

■6年女子

子どもたちは、大人の動きやマナーを見ていることに気づかされる。たとえば食プログラムの準備を頼むと、包丁をもって移動する際に「後ろを通ります」と注意を促す為の声を掛け合いをする。イベント後には「お疲れさまです」とお互いの労をねぎらう。

大人は大変忙しくしていて、子どもたちに仕事を頼むことが多い。子どもたちは細かく指示されなくとも、その『場』の一員としてマナーもやり方も習得しているようだ。

■かつて体力の低下が気になり、「浜っ子パーク」で「浜リンピック」というスポーツを楽しむイベントを開催し遊びながら体力をつけることができればよいと思ったが、「浜リンピック」に来る子はそもそも体力があり、スポーツの得意な子であった。全体のレベルアップは、学校で意図的に充実させることが肝要と思われた。

(2) 年中行事をヒントに

2008年、文化庁の委嘱事業である「伝統文化子ども教室」に申請し『身近な伝統行事を探そう！』が、採択される。身近な伝統行事を体験しつつその成り立ちを探ると、土地に根差した生業を基盤としさまざまな恵みをもたらす半面、生命を脅かすこともある大自然への恐れや祈りが行事となり、1年のサイクルの中で行われてきたことを思い起こすこととなった。この当たり前のことが都市型コミュニティでは忘れ去られてしまう。

「浜っ子パーク」で餅つき・どんど焼きなどの年中行事を取り入れてきたこともあり、年中行事で文化を伝えることができると考え、背景を伝える努力をするようになった。

かつて、地域には子どもの育ちに必要な3つの間、時間・空間・仲間があった。子どもたちは親の働く姿や他者との関わり方を常に観て真似をしていた。規範も知恵も「場」があったから継承できたのだろう。

では、市外に働きにでる人が少なくない都市型コミュニティにおいて、人と関わり人々の相互作用を見聞きできる「場」はどこにあるのだろうか。

年中行事をヒントにし、校庭の環境を整備し観察する傍ら子どもたちとかかわってきた経験から、地域の避難所でもある小学校にエコロジカルな校庭緑化を行政と多様な主体による協働で促進し、それを実行するための円卓会議開催の提案を進めていたが、残念ながらこの時も校庭を利用する様々な主体が集まって考え合う「場」を創出することができなかった。

3. つむぐ

今までの経験と年中行事をヒントに、三項関係を築きながら次の4つをつむぎあわせるイベントを計画した。

(1) 伝える

例年3月の「浜っ子パーク」では、子どもたちが大切にしていたおもちゃや小さくなった洋服、手作りお菓子等を<お客様>になぜ寄付をするかを伝え販売し、その売り上げを自分で選んだ団体に寄付している。

<お客様>は「浜っ子パーク」の中で自然と子どもを褒める役割を担い、子どもたちの行動をほめる。子どもたちは<わくわく>しくうれしい>気持ちになる。

子どもたちは「浜っ子パーク」の主催者から寄付先の説明を受け、全額寄付をする。子どもたちはここでも褒められる。茅ヶ崎市緑のまちづくり基金への寄付は、服部市長に手渡ししているので子ども達の満足感は一層大きい。

自分の気持ちや想いを伝えていくことで正の循環がおきる。



(2) うれしい たのしい おいしい

自分の考えや想いを伝えフィードバックがあると「うれしい」。自分が「うれしい」と感じると人にも同じことをしたくなり、反応があると「たのしい」。うれしいこと・たのしいことを、みんなで「おいしい」ものを食べ、リラックスする中で伝えあうと幸せな気分になる。こういった「快」の感情が満たされると、情報共有のチャンスがうまれる

(3) わくわくどきどきスパイラル

子どもやその保護者の反応の中に「自分自身のメリット」「わが子のメリット」「善意の実行への願望」「実行による充足感」を満たす体験学習支援を企画することで、学び合いの渦(=「わくわく・どきどきスパイラル」)を見出すことができた。人間の本質的な欲求として、「生きていくこと」「活かされること」があるのではないかと感じるようになった。

(4) すき きらい どうしよう

ふつうの生活者が抱く直感的な感情「すき」「きらい」、「すてきだ」「いやだ」に対して、「どうしてそう思うのか」と聞き合うことで、その「感情」の意味がわかることが少なくない。2009年、日本財団の助成金を得て、多様な主体との連携を意識した「茅ヶ崎まるかじり検定」をスタートさせた。初年度は「茅ヶ崎まるかじり探検隊」を実施し、身近な湘南海岸公園を散策し「いいな、と思ったこと」「いやだな、と思ったこと」そして「こうなればいいな」と思ったことを書きだしてもらった。とて

も多くのアイデアがでた。この時の経験から「どう感じるか」「どう思うか」をスタートとし、その情報を自分から探り交流することが可能ではないか、と考えるにいたった。

加えて「茅ヶ崎まるかじり探検隊」では、団体代表者である私だけではなく協力頂いた大学や企業の専門家に夢を語っていただいた。大人の夢に子どもも共感できる。

「茅ヶ崎まるかじり検定」で、「茅ヶ崎を大切にしたい」という想いを、多くの人や団体と共有することを大前提とするための合意形成を進めるプラットフォームをつくることができなかつた。しかし一人ひとりの夢をつなげば「みんなで茅ヶ崎を大切にしたい」という物語を編み出すことが可能ではないかと思うことができた。



大学生と湘南海岸公園を探検し、調査中

4. おりなす

(1) 「防災教育チャレンジプラン」

様々な経験を積み重ねていき、2010年12月に、茅ヶ崎トラストチームは「いつやってくるかわからない災害に備え、大切な命を守り、できるだけ被害を減らし、万が一被害にあったときすぐに立ち直る力を一人一人が身に付けるため、全国の地域や学校で防災教育を推進する為の」¹¹「防災教育チャレンジプラン」に応募し、2011年2月26日に有明の丘基幹的広域防災拠点施設で開催されたワークショップ¹²で、実践団体の一つとしてプレゼンを行った。その際、専門家から、津波に対する防災教育の実施に対する指摘を受けたが、地震大国、まして海のそばに住んでいるにも関わらず、私たちは全く想定していなかつた。その後、3月11日、東日本大震災が起き、津波を想定していなかつたことに愕然とし、まずは、コミュニティの捉え方の見直しに着手した。

消防庁「災害対応能力の維持向上のための地域コミュニティのあり方に関する検討会」報告書概要¹³の中で、コミュニティの「機能」を、地域住民の間で、その地域の課題・問題点が共有され、課題解決のために行動することとし、コミュニティの「基盤」とは、コミュニティがその機能を維持・促進するための組織・枠組み・制度・場などの環境と定義している。

滋賀県の「地域減災しくみづくり検討会」の手による「地域減災しくみづくり検討会報告書」の中で、連携・協働の意義を（1）災害を「我が事」と思う「和が広がる」こと。（2）減災・防災に関する地域の「知恵が伝わる」こと（3）地域の構成員の持つそれぞれの減災・防災に関する「強みが活かせる」こと、として、構成員のゆるやかな連携を説いている。これらに従えば、私たちは、地域の課題・問題点を共有し、課題解決のために行動するという経験の積み重ねが少ない。地震大国の海のそばに住み、避難できる構造物が少なく、消防団がないにもかかわらず、不安を声に出して伝えあうことがない。又、公的機関による垂直的な指揮系統からの情報が、住民に周知されていないことに対する危機感もない、といえる。

減災への取り組みは、コミュニティを再度見直し「情報の共有がなされていない」ことを課題とし

11 <http://www.bosai-study.net/top.html> から引用、

12 主催：防災教育チャレンジプラン実行委員会、内閣府（防災担当）

後援：総務省消防庁、文部科学省、国土交通省、全国知事会、全国市長会、全国町村会、日本赤十字社
全国都道府県教育委員会連合会、日本PTA全国協議会

13 http://www.e-college.fdma.go.jp/search/pdf/b_81.pdfから引用

て、地域の避難所となる学校の校庭を活動の場に行っていることを切り口に、①毎月、実施してる体験・遊び場「浜っ子パーク」に、防災要素を取り込み、防災意識を高めること ②対話・体験型イベント「Theサバイバル2011」を開催し、子どもを中心とした活動を行っている諸団体にアプローチし、「子どもの安全」という共通の課題で連携、対話を重ねながら準備を進める、とした。

① 都市型コミュニティにおける年中行事

かつて、年中行事が様々な人を交流させ、自然や社会との折り合いの付け方の作法を伝えていたことに着目し、都市型コミュニティにおいては地域の避難所である学校の校庭利用を、多くの人が考え合うことで「新しい公共」という考え方の礎にし、そこでネットワークこそが、いざ、という時の助け合い支え合いに繋がると、地域での活動を通して確信した。それは、決して難しいことではなく、「いただきます」「ありがとう」「もったいない」「わけっこ」「ありがとう」「おたがいさま」という言葉で、その意義をとらえることができる。「浜っ子パーク」への参加条件と同様、趣旨をよく理解し、参加の意思は、参加者自身で決めることとする。子どもの参加については、各家庭で、道中の安全、困った時の対処方法（困った時は、自分で考える、自分で解決できなかったら、まわりの友達と考える、それでも解決できない時は、大人に相談すること）など子どもとよく話し合ってもらい、責任の分担を理解してもらう事で可能だと考えた。

② Theサバイバル2011

ふつうの生活者であり専門性のない茅ヶ崎トラストチームのメンバーにとって、二つめの計画「Theサバイバル2011」の課題設定が難しかった。しかし、10月の「防災教育チャレンジプラン」の中間発表会で現状報告を行い、専門家による感想やアドバイスをもらい、再度検討し課題設定ができた。

専門家からの情報は、受け手側である生活者の抱えている多くの悩み等を無視して受け入れられることは、まず、ない。加えて、悩みが、具体的であるため、結果的に部分最適を目指すことになりがちである。ふつうの生活者が課題に取り組み行動するためにも、又、学び続ける意味でも、防災教育チャレンジプランのような支援の仕組みは心強い。今後、超高齢化社会を支えるためにも、いつでも・誰でも・どこからでも学び、社会への参加・参画を支援してもらえる仕組みが、益々必要となるだろうと改めて思うこととなった。

困った時は相談できるという安心感を背景に多様な主体の想いを束ね、実行委員会形式で集い、考え合う「場」としての対話・体感型減災イベント「Theサバイバル2011」を、情報をいかにして共有するかを考えながら、次のように組み立てた。

- みんなが共通して、もっていなければならない知識の確認
- 知識や情報を、身体や五感を使って活動することで獲得
- 専門家の知識や、経験者の想いの公開
- 地域内の情報の交流
- どの程度伝わっているのか、の確認

平成23年11月19日、豪雨の中、まさにサバイバルしながら80名の参加者を得て実施することとなっ



「Theサバイバル2010」での様子

た「Theサバイバル2011」は、減災への啓発に加えて、縦と横のネットワークづくり、構成員のゆるやかな連携の可能性のみならず、専門的知・経験知等が交流し、あらたなアイデアが創発される可能性さえも見出す手応えを、そのあとの反応から得ることとなった。

詳細は、防災教育チャレンジプランで作成する報告書に譲るとして、ここでは気をつけたことのポイントをあげる。

(ア) 目をみて、心から話す

みんなが共通して、もっていなければならない知識を、受付で意識してもらえようにした。日頃より、浜っ子パークでは、道中の安全は家庭の責任であることを伝えている。では、具体的に、家庭の責任とはどういうことか。家庭での約束を、聞き取ることから始めた。

イベント参加者、特に子どもは問題意識をもって参加するわけではない。目をみて心から話し、意識下にある安全へのニーズを掘り起こすことから始めなければ、その後の情報の伝達がうまくいかない。受付の皆さんには、趣旨と指示的な言い方をしないようお願いしたシートを渡し、後は現場での工夫にお任せした。そこでは学び合いがおき、よりよい工夫がなされていた。

(イ) 五感と身体で理解する

今回、すでに、環境と防災を組み合わせた防災要素探しを、ゲーム感覚のプログラムに仕立て、その反応の良さを予想していたが、3.11の経験は、イベントを楽しみながらも、子どもたち自ら知識を習得する意欲を高めていた。音、高さ時間と距離の関係を、身をもって知る体験コーナーを、楽しみながらも真摯に受け止めていた様子を目のあたりにし、その後のインタビューや帰宅後の感想を保護者等から聞いて実感することとなる。精度を上げるためには、専門家との協力が、益々重要になってきた。



6月の浜っ子パークの案内チラシ

(ウ) 専門家に聞く

新しい津波ハザードマップができていない中、専門的な知見を様々な年代の人にかかにして繋げればよいか、又発達段階にあわせてどのように伝えればよいか悩んだ末、苦肉の策として「目指せ、釜石！てんでんこ!!」をキャッチフレーズとし、専門家の支援による釜石市教育委員会の総合的な取組み情報と成果を紹介した。

加えて、体験コーナーでは、地域にお住まいの測量士の方に高さをイメージする方法を教わり、津波の高さを想像した。防災対策課の協力を受けて瓦礫の中から人を助ける方法を紹介してもらい、子どもの評判は高かった。

専門家の「知」は、総合的かつ多様な視点を提供し、活動の質を向上させるといった2つの意味で、私たちの活動の後ろ盾となった。



茅ヶ崎市防災対策課の協力

(エ) 経験者に聞く

阪神淡路大震災の時、私には情報ツールを使いこなす技術がなく、友人・家族等に電話で現場の状況を問い合わせるしかなかった。そこで得た現場の声はマスメディアから得る情報とは違った。情報とは人を介して意味を持つことだと痛感した。

3.11の大地震後の情報はYouTubeやTwitter・メーリングリストから得ることができた。特に防災教育チャレンジプラン実行委員会事務局から得る現地の情報は、無批判に受け容れることの是非とは別に、私たちのような行動が中心の団体にとっては、公共性という視点からも選択しやすい情報群であった。

今回のイベントでは、経験者の生の声を、立ち直ろうと行動している団体を紹介することで得た。幸いなことに4年生の1クラスが総合的な学習の一貫として参加し、学び合いの渦をつくることができた。



石巻へのおたがいさまプロジェクト

(オ) 地域内のさまざまな主体との交流

イベントでは、地域内の情報を集めどんな情報が地域に有り何が足りないかを検討しようと試みた。情報共有のきっかけづくりとなった防災関連の掲示物は、子どもたちには関心を持ちにくい「地域の方は、みんなを守るために防災訓練をやってくれたり、いろいろ調べてくれているんだよ。」と対話を通して説明すると守られている安心感をもてたようであった。又、正解をもたないマーケティングクイズに対して自由に発言してくれた。

防災減災の情報の積み上げは、この時がスタートといえる。

(カ) ふりかえり

改善すべき課題は多いものの、子どもたちと振り返りの場を設けることができた。又、実施できなかつたが認証制へのアイデアもうまれた。

地域の協力団体にお礼状を送ることで、再度趣旨を伝えることとなった。



協力頂いた団体へのお礼状

(キ) 第三者からの評価

タウンニュース、ラジオ、神奈川新聞の取材を受け、私たちの活動がどんな風に受け入れられたかを知ることとなった。又、取材を受けたことで、活動への信頼感が増すこととなった。

(1) 隠れ鬼ごっこ 茅ヶ崎山公園逃走中

2011年12月17日、小学生の「ディズニールランドに負けないくらい楽しい遊び」企画に、茅ヶ崎トラストチームの防災・減災への取り組みを合わせて、「茅ヶ崎まるかじりプロジェクト『隠れ鬼ごっこ 茅ヶ崎山公園 逃走中』」を実施した。いつもと違うフィールドでの活動であることから、新たな可能性を見出すことができた。

- ① 海側、山側での、人・自然の交流
- ② 異年齢の交流で、新たな視点の創発（子ども、若者、大人）
- ③ 子どもたちはいつも家の近くにいるのではない。茅ヶ崎全域での防災・減災情報の必要性



海+山+人=茅ヶ崎の魅力

さいごに

振りかえってみると、継続させることができなかつた事業が多い。一人ひとりの善意や想いを大切に、多様な考えを受け入れながら考え合うことができていなかった、と思われる。

3.11を経験した今、減災への取り組みはまったなしであった。仕事をしながら家族に負担をかけ、時間のやりくりに対応の覚悟をもって進めることとなった。

小学校の懇談会に人が集まらなくなってきたとき。女性も、出産や子育てを理由に仕事をやめる時代ではない。しかし、今まで、PTAや、スポーツ団体、自治会等地域での地道な活動があって、まちの安全は守られてきた。それらを担うのは今後誰なのだろうか？覚悟をもってすべきことなのだろうか？

できる限り多くの人に、自分たちの「まち」を大切にすることに参加してもらい工夫ができないだろうか。互いの考えに耳を傾け、考えの違いについては「どうしてだろう？」と共に考え、さまざまなリスクとコストを勘案して折り合いをつけることができないだろうか？

たとえば、避難所となる学校の校庭を地域の人が自ら管理し、自分たちでルールをつくることはできないだろうか。防災教育チャレンジプラン実行委員会のような専門家の「知」にアクセスできる仕組みができないだろうか。若い人たちや保護者が、子どもたちや地域のことに関わることで、その後のキャリアにつながる仕掛けができないだろうか？

魅力あふれる仲間や地域の人々、そして素人でしかない私たちに丁寧に対応して下さる行政職員・専門家の皆さんと接するたびに、その力をつなぎ・つむぎ・おりなすことができないのが実にもったいない、と感じるのである。